

俳句誌

四月号



花鳥諷詠

4月号 (445号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和7年4月■第445号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正	2
	渡辺 光子	4

第三十六回日本伝統俳句協会賞

受賞者のことば	7
選者評	8
選考経過	14

第三十七回花鳥諷詠賞

一頁の鑑賞	真篠みどり	16
	大石 靖子	17
この人の作品	西田 梅女	18
卯浪		19

佐藤郁良氏に聞く (2)

阪西 敦子20

支部だより (神奈川部会)

神奈川部会三回の文法講座を終えて	長谷川楨子	26
------------------------	-------------	----

虚子研究 『六百五十句』 研究 (62)

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

著ぶくれてゐる一団に加はりぬ

由布立川 さよ子

いつの間に古参となりて初句会

前橋新木 ひろみ

あるだけの正月飾りして独り

糸島占部 ゆき江

峰寺へ尼の手土産寒卵

七尾橋本 紀美子

枯芝の転んでみたくなる広さ

西子三瀬 教世

二句短評

一句目——省略は、作句のポイント。「著ぶくれてゐる」黒々とした塊（かたまり）に作者も加わったと詠んだ句。このようにどこまでも情を断って客観的即物的で無表情に描くことで、地上の寒さを詠んだ。「著ぶくれ」の季題の強さをよく生かした句。

二句目——「初句会」といえばめでたいというパターンだが、この句には、ふっと己をふり返り時の流れのはやさを思う作者がいる。これもまた、「初句会」のひとつの情である。

入選六十句

風花の庭や玻璃戸の中の猫

尼崎 ほりもとちか

端溪のくぼみも愛づる初硯

福山 小林 翠子

心の荷下ろせし夜の爛熱く

高松 白根 純子

雪女さらりと躲す身の早さ

福岡 西村 榮子

引越しの荷の累々と春の雨

金沢 瀬古 祥子

山彦の締めくくりたる除夜の鐘

加賀 正藤 宗郎

籠もりたる部屋のいつしか咳も止み

今治 横田青天子

賀状書くしづかな午後の文机

宇部 萬 洋子

紅を使ひ果たして紅葉散る

糸島 小河水紗子

白鳥の白より川面明けにけり

岡山 名木田純子

月忌僧寒くなりましたとぼつり

北海道 西澤カズ子

捨て切りて失ふものなき冬木

久留米 野口 桂子

大川の日々の消息都鳥

高崎 清水 教子

紙で指切つてしまひし今朝の冬

徳島 真鍋 万緑

海へきて海見ず帰る鮫鱈鍋

福岡 山口 裕子

これよりは神の領域花ひひらぎ 熊本 南野 幸子
 数へ日の寸暇を訪ねくれし姪 金沢 中村 曜子
 届きたるどかと一本釣りの鯛 海老名 野村香代子
 いととなく幼の寢息除夜の鐘 福岡 三坂 一生
 春の虹愛子の墓は虚子の側 姫路 谷 春代
 待たさるる正座の膝の寒さかな 羽生 樋口レイ子
 沈む日を高く見送る冬の月 熊本 井芹真一郎
 束ねても寂しき花や野水仙 京都 本谷眞治郎
 一筋の山の煙や冬に入る うきは 金子 清黙
 世に媚びることなく生きて著ぶくれて 大牟田 介弘 浩司
 紅萩や母娘で通ふ稽古事 熊本 矢澤 幸乃
 花よりも棘いきいきと冬薔薇 高松 浅野クニ子
 つぶやきて人の後ゆく寒さかな 高松 金澤 正恵
 小晦日計報静かに届きけり 尾道 大庭 弘
 やぐら組む八万本の干大根 福岡 平山 順子

息白く話の筋をかたりけり 福岡 津田 富子
 高高と父の遺愛の家紋風 阿南 鎌田 黄鳥
 又太きもののの手応へ闇汁会 高知 坂本喜代子
 ストープを消して余震に備へをり 金沢 篠島 安子
 諷詠の道一歩づつ去年今年 長岡 岸 祥子
 その人に語らふやうに賀状書く 生駒 南 純子
 新玉の年の始めのたなごころ 半田 稲葉 京閑
 賑やかに子ら正月を連れて来し 高知 前田まこと
 まだ誰も気付かぬ蓄福寿草 伊賀 松村 咲子
 鳩の来て鴨来て湖のふくれゆく 北九州 元田 品子
 炭継ぎて午後の稽古の子らを待つ 阿南 谷川 宗和
 若やぎて戻りし妻や女正月 神戸 明石 裕子
 緞帳の降りて咳き拡がりぬ 高松 宇和川 厚
 書初の香りの満つる部屋となり 名古屋 藤井 裕子
 日脚伸びつつつ厨事重ねつつ 大牟田 猿渡 章子

ステージに溢るる楽器初稽古 鹿兒島 角屋敷昭子

災害の多き一年冬至風呂 大阪 中本 宙

このところ続く好日枇杷の花 町田 坂下 洋子

冬薔薇や誰も気付かぬ誕生日 香川 三宅久美子

鯉濃の宴の夜や川普請 神戸 柏原 憲治

記紀の鳥きりりと座る初景色 福岡 野口 明子

一尺の髭まだ動く飾海老 東京 早坂 洋子

月冴ゆる白き光をしたたらせ 東京 篠崎 千春

潮の香をたたせて牡蠣をうちにつけり 八代 山下しげ人

咳の子の抱いて離さぬぬひぐるみ 福岡 工藤 友子

先生はけふも往診初雀 東京 内藤 花六

師と交はす二言三言初句会 東京 青園 直美

寒菊や孫の弔辞に君の声 諫早 外輪ふみえ

入魂の一矢放ちて弓始 福岡 山永多恵子

窓といふ窓の光りて春隣 所沢 木村 佑

● 渡辺光子選

特選五句

神奈備を仰ぎ睨に若菜摘む 神戸 上岡 あきら

太平洋閨に沈みてペチカ燃ゆ 岡山 伴 明子

毀れゆく母の視線に冬の星 三木 松本 幸平

一筋の山の煙や冬に入る うえきは 金子 清黙

牡蠣殻の山に埋もれて開港碑 大牟田 鹿子生 憲二

二句短評

一句目——残る淑気を感じつつ日常へ戻ってゆく、その境界線のような七日の頃。若菜すなわち自然の恵みを頂きながら神の域と人の域を思う。古典的な言葉の幹旋が美しく、暮しぶりを格調高く詠みあげた。

二句目——「太平洋」に歴史的な意味を思うのは、ペチカに時を遡らせる作用があるからだろうか。ペチカは令和より昭和がよく馴染む。暖かで頑丈に守られた暮し。一方、太平洋の夜の訪れを「閨に沈む」と叙す重さ。その対比が鮮烈かつ重層的だ。

入選六十句

雪もよひ燭を明るくしてひとり 長野 鈴木しどみ

終章をめぐる一語や冬薔薇 岡山 岩崎 正子

籠もりたる部屋のいつしか咳も止み 今治 横田青天子

東京の坂に名のあり寒椿 東京 梅野 ぎん

へうきんな鷺が最後に替へ残る 大阪 上西左大信

足のつぼ目のつぼを押す初湯かな 松山 篠原みどり

日向ぼこらしき声あり砲台址 名古屋 齊藤 始子

海へきて海見ず帰る鮫鱈鍋 福岡 山口 裕子

これよりは神の領域花ひひらぎ 熊本 南野 幸子

棘赤く人を拒みて冬薔薇 高松 もりおかともこ

いつとなく幼の寢息除夜の鐘 福岡 三坂 一生

待たさるる正座の膝の寒さかな 羽生 樋口レイ子

束ねても寂しき花や野水仙 京都 本谷眞治郎

冬帽子被り肩より抜く力 鹿児島 萩尾 葉月

枯芝の転んでみたくなる広さ 西予 三瀬 教世

つぶやきて人の後ゆく寒さかな 高松 金澤 正恵

雪女亡き妹であらまほし 浜松 朝井 治代

無人駅一人下車して野菊道 長崎 濱口 星火

対側のホームは別の冬の星 神戸 石田 裕美

又太きものの手応へ闇汁会 高知 坂本喜代子

日めくりの令和七年大旦 京都 中島 慶雄

切株に薄き座布団梅見茶屋 鳥取 石尾 正子

銀色の太平洋の淑気かな 福島 遠藤 里乃

まだ誰も気付かぬ薔福寿草 伊賀 松村 咲子

嫁に注ぎ嫁につがれて屠蘇香る 東京 飯島 千青

働けどはたらけどなほ隙間風 高知 駒木 基克

有明の波の詩あり初明り 大川 今泉 美代

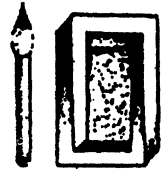
絡みつく全てを枯らし冬木立つ 藤岡 飯塚 柚花

著ぶくれてゐる一団に加はりぬ 由布 立川さよ子

日脚伸びつつ厨房事重ねつつ 大牟田 猿渡 章子

鳥声の二色三色春を待つ 熊本 西村 孝子
 大達磨どんどの点火待つ目玉 十日町 小川のおこ
 出来ることあるが幸せ老の春 行田 細村 雅子
 凍鶴の考ふること眠ること 高松 荒井多美枝
 初鳴の陣に夕日の濃かりけり 高山 原田 尚子
 北風に騒がしい木と静かな木 福山 貝原 玲子
 年始の子校歌の山河見て帰る 高崎 津久井洋子
 冬薔薇や誰も気付かぬ誕生日 香川 三宅久美子
 雪明り残して今日の暮れてゆく 加賀 堀口 紀子
 大好きなみんなの笑顔クリスマス 仙台 本間ゆかり
 宮の杜見えて冬野に行き止まる 高松 福江 昌子
 遠くより声掛けくるる鋏始 高知 片岡 幸枝
 屠蘇酌めり朱盃の松を揺らしつつ 西宮 山谷 彰子
 凧や海鳴りの音登り来る 宇部 縄田 悦子
 一尺の髭まだ動く飾海老 東京 早坂 洋子

背伸びする子の眉見えし初鏡 神戸 谷本 逸歩
 乗初の里へと海に沿ひ行けり 鹿児島 永里 瑞代
 潮の香をたたせて牡蠣をうちにけり 八代 山下しげ人
 縮こまりながら見てゐる福寿草 埼玉 真篠みどり
 焼け落ちてどんどの達磨こちら向く 横浜 秋吉 斉
 山眠る淋しき色になりにけり 浜田 小池ミサエ
 狛犬の紙垂のゆるみも春隣 吹田 小井川和子
 独り居の米一握り七日粥 伊賀 光岡代里子
 風花や白き巨船の入港す 長崎 伊藤ひとみ
 鶉色に天草灘の初明り 長崎 植村 華文
 まつすぐに朝日差す卓寒卵 鹿児島 松尾あやめ
 丁寧包丁研げる女正月 横浜 開米 遊子
 窓といふ窓の光りて春隣 所沢 木村 佑
 あかぎれのクリームの香の中で寝る 東京 鹿谷 白月
 佳きことも侘しきことも年賀状 東京 毛利 律子



編集後記

鳥雲に杭せは川を梳り

措大

作者は「そだい」と読む。本名平松芳夫。京大在学中、野村泊月・日野草城らに学び、故郷岡山で教職につく。知られたホトトギス系作家である。先日、岡山出身の岸本尚毅さんと、虚子門作家の句集の在り方について立ち話をし、『措大句集』『第二措大句集』『第三措大句集』という一見素気ない編み方が、ひとつの典型だと語り合った。その対極に、作家性の濃い秋櫻子の『葛飾』や草田男の『長子』がある。

●九月の全国大会は、漆黒の天守閣で、

「鳥城」とも呼ばれる岡山城の麓、日本三名園の一つ後楽園が、主たる吟行地となります。足をのばせば、瀬戸の風光や、本殿再建六百年を迎える大社で長い回廊もゆかしい吉備津神社、さらには林原美術館（岡山）や大原美術館（倉敷）など文化施設も豊富です。

●六月の総会は昨年同様、桜田門の法曹会館で執り行います。朝の連続ドラマのロケ地ともなった格調高い会場で、周辺もお濠端、風光も格別です。ミニシンポジウムでは、岡安紀元氏ご所蔵の貴重な虚子の遺墨を、書道の専門家に読み解いて頂きます。虚子も漱石も、俳句は「呼吸」の文学だと言いつ残しています。その筆使いから虚子の氣息が立ち上がってくるはずですよ。

●二月号に誤記がありました。記して修正し、お詫び申し上げます。

25頁2段4行目 行水↓打水
(井上泰至)

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
8月号	5月20日	井上泰至 峯尾文世
9月号	6月20日	今井肖子 山下しげ人
10月号	7月20日	井上泰至 涌羅由美
11月号	8月20日	今井肖子 赤間学

花鳥諷詠四月号(通巻第四四五号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和七年四月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シヤンプル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一・一九二